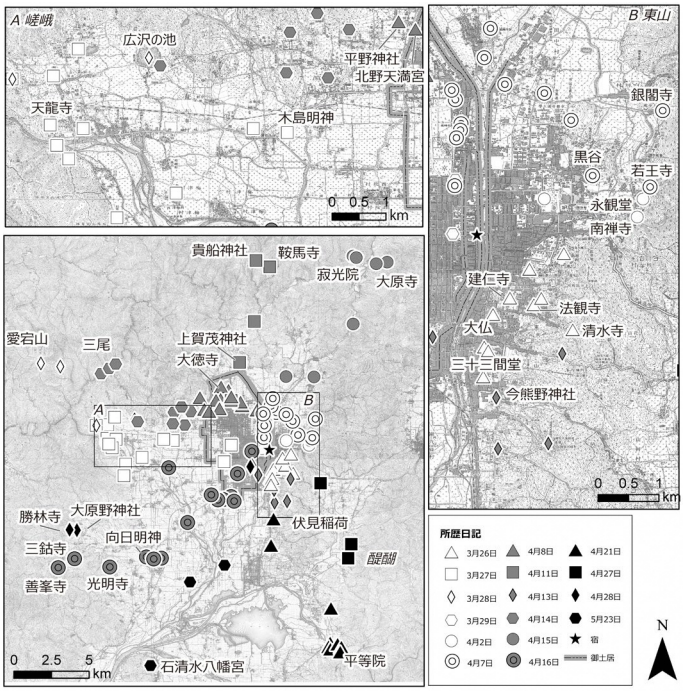
## ■ 近世初期の知識人・石出常軒の名所めぐり

『所歴日記』

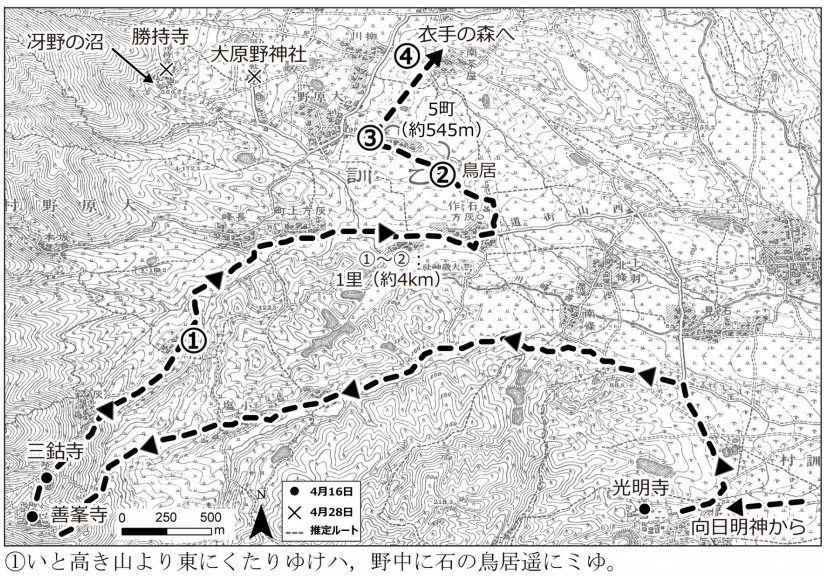
・作者：石出常軒（江戸幕府の牢屋奉行）
・居住地：武蔵国江戸
・旅の期間：
　寛文4（1664）年3月3日～閏5月7日
　→案内記の出版が盛んになる前の時期。
・旅の目的：有馬温泉への湯治
・歌枕・旧跡を訪ねることが好き。
・和歌への造詣が深い。




出典：発表者作成

4月16日

六角堂 → 本圀寺 → 大通寺 → 東寺 → 四ツ塚 → 羅城門跡 → 西寺
→ 梅津川 → 向日明神 → 真経寺 → 奥法寺 → 光明寺 → 善峯寺
→ 三鈷寺 → (冴野の沼) → 衣手の森




①いと高き山より東にくたりゆけハ，野中に石の鳥居遥にミゆ。
　道しれる人もなけれハ，それをしるへに一里計行て・・・
②鳥い本にいたりて見れハ，大原野春日大明神と鳥居にほり付て有。
　さ侍りと嬉しくて鳥居の奥へ五町はかり入て見れハ社の有へき木立もなく，
　唯広き野なり。
③たゝ帰り給へとしひて侘けれハ，又こそとちきりて帰る。いと口おし。
④冴野の沼ハ此野に有へしと，帰り来る道すから心を付て見侍りをれハ，
　いとひろき沼あり。

出典：発表者作成

### 歌枕「冴野の沼」を探索

歌枕とは、和歌に詠みこまれた地名のことを指す。
＝ナドコロ（名所）
近世初期は、歌枕の場所が曖昧。

それでも歌枕を訪ねて
自分も和歌を詠みたい

ほかの旅人の証言は？

『思出草』（津村宗庵・1793）

名所からの眺望

大山崎
天王の社

拝殿のやすらひつゝ、岨のかたに出てのそめは、淀・伏見をかけて川〻のこるくまなく、むかひにあたれる山は畠山義就のこもれる勝竜寺の城とかや、その南にひくうみゆるは男山なり。猶みんなみにめをうつせは難波の城、しろ／＼とみゆ、海つらをかけて帆影の霞をわくるけしきなといはんかたなし。

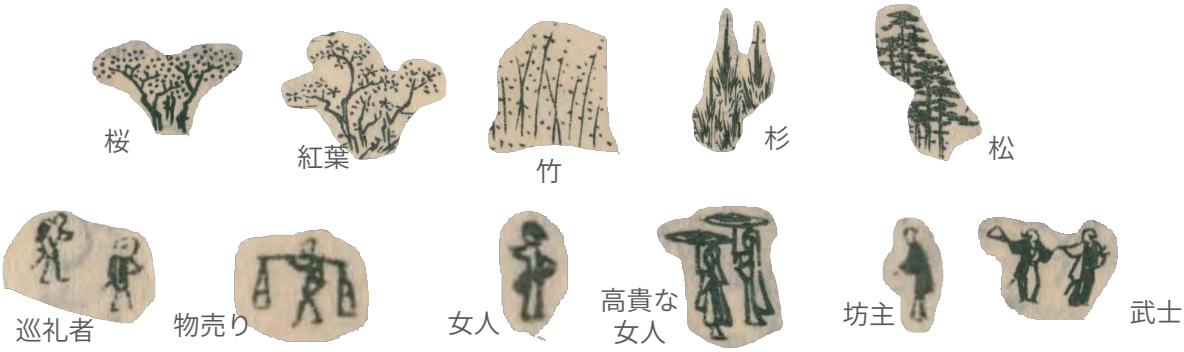
花がきれい！

長岡
天満宮

もとはいさゝかなる宮居にてありしをすりくはへ事をそへ、春秋の詠たへすあるへきやうにしなさせ給ひぬれは、花もみちをはしめ、つゝし・山吹・かきつはた、くさ／＼のはなまて、折にふれたる草木ともしからす、今は都の人つねにまうてあそふところとは成ぬるとそ。

『百たらずの日記』（石瓦翁・1838）

（九月）廿三日　辰のはしめつ方出立…中略…（離宮八幡宮を出て）案内のものをもとめ、利久（休）のかたてしといふ妙喜庵をとふ、大（太）閤のしはしおはせしといふ座敷もあり。阪をのほりて天王山を見あけ〔秀吉太閤と明智光秀と此山崎にて戦ひし時、此山をとりたらん方、軍には勝なんとてたかひに争ひし所なりといふ〕、雨にて路次あやしけれはのほらす。観音寺景いとよし、四天門に勅額有。こゝをくたりて長岡の天満宮に詣つ、こゝも宮井大きやかなり。方丈池いとひろく、そのめくり紅楓夥しくありてよく染たるか中に、また青葉なるもましりて殊にすくれたり。…中略…向日の明神へ参る。十八町ありといふ、大社なり。ことに此ころあらたに造り改めて美麗なり。申の半過るころ、こゝのむかひなる旅屋かたにとまる。

## ■ 名所図会に表象された名所

名所図会に描かれるもの